

オラルヒストリ あとがき

あとがき

世の中にはことのはずみというものがある。考えてみれば私が海軍に入ったのもことの弾みであったが、この本の発行も全くことの弾みであった。私はもともと自分史の刊行はもとよりその筆をとることも全く考えていなかった。その価値があるとは思えなかったからである。ところが防衛研究所戦史部では、戦後防衛史研究の一環としてオラルヒストリを企図し、私に協力を依頼された。そして主任研究官相沢淳氏、所員岡田志津枝三等空佐、教官中島信吾氏に当時防衛大学校図書館長であった影山好一郎教授を加えたチムを以て、月一回のペースで聞き取りを始められた。これらの方々が私自身忘れてしまったような昔のことまでよく研究して、的確な質問をされたことに加え、その雰囲気は誠に好ましかったこともあって、この聞き取りは一九回、二年近くに及び、その成果は防衛研究所から刊行された。これで私の役割は終わったと思っていたところ、相沢氏は研究所からの刊行は予算の関係上その数が限定されるので、民間からも発行したいとして、中央公論社の吉田大作氏に話をもち込んで、今回の発行となったものである。

このような経緯から見ても、この本の内容はもちろん私の責任であるが、これが読者の目に触れるようになったのは、ひとえに戦史部の各位特に相沢氏および中央公論吉田氏のご尽力によるものであって、深く謝意を表する次第である。

平成二十一年二月一五日